報道発表資料

東京消防庁　Tokyo Fire Department

平成３０年９月１２日

高齢者の日常生活事故を防ぐために

～敬老の日を前に、今一度高齢者の事故について知ろう～

東京消防庁では、高齢者の転倒防止事故を防ぐため、平成２８年中の**事故データを分析**した結果、高齢者の日常生活事故のうち、**約８割が「ころぶ事故」**によるものでした。

このことから、高齢者の「ころぶ事故」を防ぐために、都民の皆様に向けて、**リーフレット**（別添え１）**を作成**しました。

敬老の日を前に、今一度高齢者の**事故の実態について知り、各家庭で事故防止対策を考えてもらう**ことが重要です。

【過去５年間にみる、高齢者の日常生活事故の概要】

（平成２５年から平成２９年まで）

１　高齢者（６５歳以上）の事故は、過去５年間で３４５，１５９人が救急搬送されています。高齢者の救急搬送人員は年々増加し、全体に占める高齢者の割合も高くなっています。

２　事故は、「ころぶ事故」によるものが最も多く、次いで「落ちる」、「ものがつまる・ものが入る」と続いています。発生件数は少ないものの「おぼれ」は、毎年９割を超える人が中等症以上となっており、十分な注意が必要です。

３　事故の多くは住宅内で発生しており、そのほとんどが一番身近な居室・寝室で起こっています。

詳細は、資料（別添え２）を参照してください。

問合せ先
東京消防庁（代）　電話 3212 - 2111
防災安全課防災安全係　内線 4206
広報課報道係　内線 2346～2350

別添え1

転ばぬ先の知恵で「おっと危ない」を無くそう!

ころぶ事故防止の心得

屋内

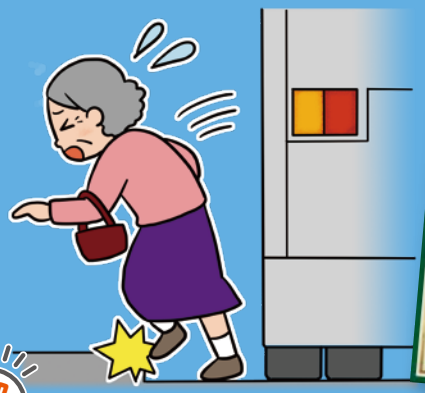
屋外

家の中でも外でも
しっかり事故防止!

掴まらず立ち上がる癖 おっと危ない!

知恵 近くのものにしっかり掴まろう!

乗り物の乗り降り段差 おっと危ない!



知恵 足元の段差に気をつけ、乗り降りを!

立ったまま靴下履いて おっと危ない!

知恵 無理に片足立ちせず腰掛けて!

自転車で段差乗り越え おっと危ない!

知恵 急がずあわてず慎重に!

東京消防庁マスコット
キュータ

すり足で敷居につまづき おっと危ない!

知恵 体力増強!
つま先上げて
すり足改善!

ふらふらとエスカレーター おっと危ない!

知恵 しっかり
手すりを
掴みましょう!

東京消防庁

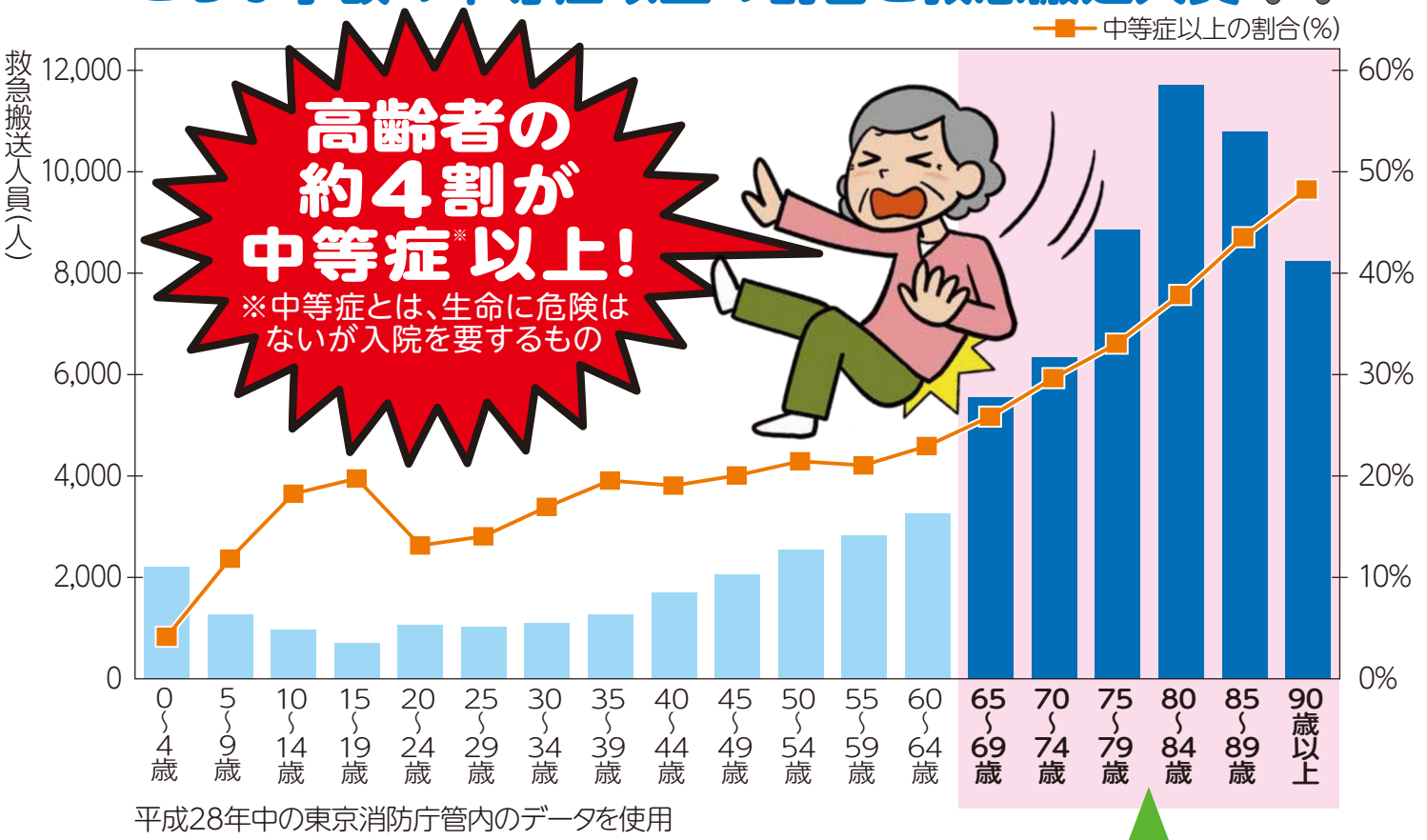
高齢者の日常生活事故のうち
ころぶ事故が約8割!

ちょっとした心がけで
ころぶ事故は防げます!

東京消防庁マスコット
キュータ

日常生活における事故で、救急搬送されている高齢者は年々増えています。
特に、ころぶ事故は、高齢者の日常生活の事故のうち約8割を占めています。

ころぶ事故の中等症以上の割合と救急搬送人員



平成28年中の東京消防庁管内のデータを使用

高齢者は若い人と比べ、ころんだ際に重症化しやすく、寝たきりになる場合もあるので、注意が必要です。
家族や地域で事故防止を考えることも大変重要です。

東京消防庁マスコット
キュータ

東京消防庁

東京消防 検索
http://www.tfd.metro.tokyo.ip

TOKYO 2020 TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES
東京都

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

別添え２

救急搬送データから見る高齢者の事故
～日常生活の事故を防ぐために～

東京消防庁管内[1)]では、平成２９年中、日常生活の事故（交通事故を除く。）により、約１３万６千人が救急搬送されています。救急搬送の半数以上は高齢者[2)]で、平成２５年から平成２９年までの５年間に３４万人以上の高齢者が日常生活の中の事故で救急車により医療機関へ搬送されています。

日常生活の中での思わぬケガが生活に影響を及ぼすこともあり、本人だけでなく家族や地域で事故防止を考えることは大変重要です。

１）　東京都のうち、稲城市、島しょ地区を除く地域
２）　６５歳以上

高齢者の事故防止ポイント

事故の実態や傾向を知り本人、家族、地域でそれぞれができる事故防止対策を実施しましょう。

加齢に伴い様々な身体機能が変化します（心肺機能の低下、筋力の低下、視覚・聴覚の低下、嚥下機能の低下など）。身体機能の変化について知り、事前の事故防止対策をしましょう。

ころぶ事故を防ぐために（転倒防止）

事故全体の約８割※がころぶ事故によるものです！
※「その他」、「不明」は除く

- 立ち上がる時は近くのものにしっかりとつかまりましょう。
- 着替える時には無理して片足立ちせずに腰かけましょう。
- 敷居につまずかないように、体力を増強して、つま先を上げてすり足を改善しましょう。
- 乗り物に乗り降りする際は足元の段差に気を付けましょう。
- 自転車で段差を乗り越える時は、急がずあわてず慎重に乗り越えましょう。
- エスカレーターに乗るときは、しっかりと手すりをつかみましょう。

落ちる事故を防ぐために

- 階段がある家庭では、階段には握りやすく滑りにくい手すりを設置しましょう。
- 滑り止めマットを敷くなど事故防止対策をとりましょう。

おぼれる事故を防ぐために

- 入浴は思いのほか身体に負担をかけることを知りましょう。
- 長湯・高温浴は避けましょう。
- 飲酒後の入浴はやめましょう。
- 入浴時には家族に知らせ、家族はこまめに声をかけましょう。

ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む※事故を防ぐために（窒息・誤飲防止）

- 小さく切って、良く噛みましょう。
- お茶など水分を取りながら食事しましょう。

※　以下「ものがつまる等」という。

1　過去５年間の高齢者の日常生活事故発生状況

⑴　高齢者の日常生活事故の発生状況

平成２５年からの５年間を見ると、高齢者の事故は年々増加しています。平成２５年には、高齢者の救急搬送は６１，９２８人でしたが、平成２９年には１４，９６１人増加し、７６，８８９人が救急搬送されています（図１－１）。

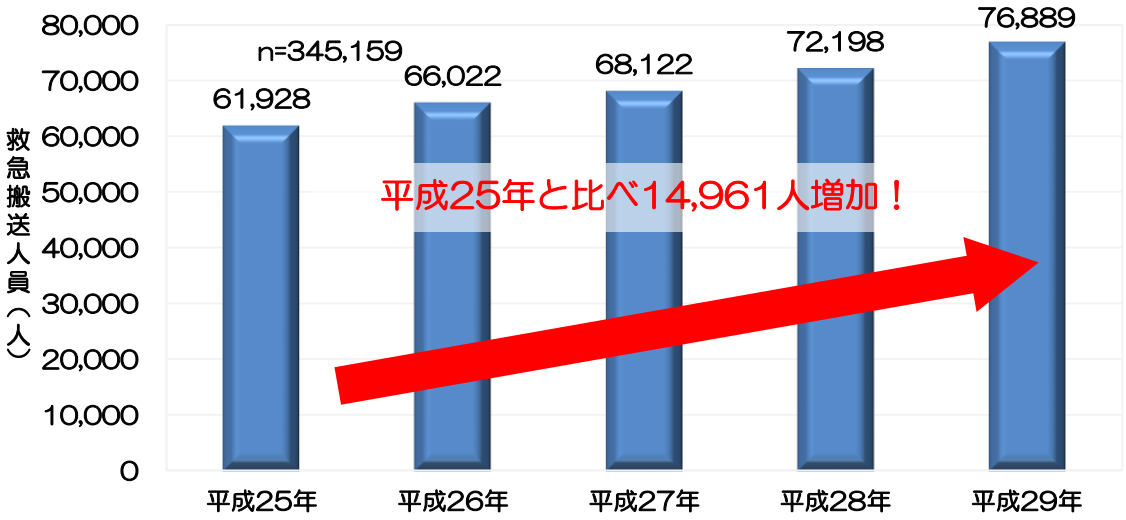
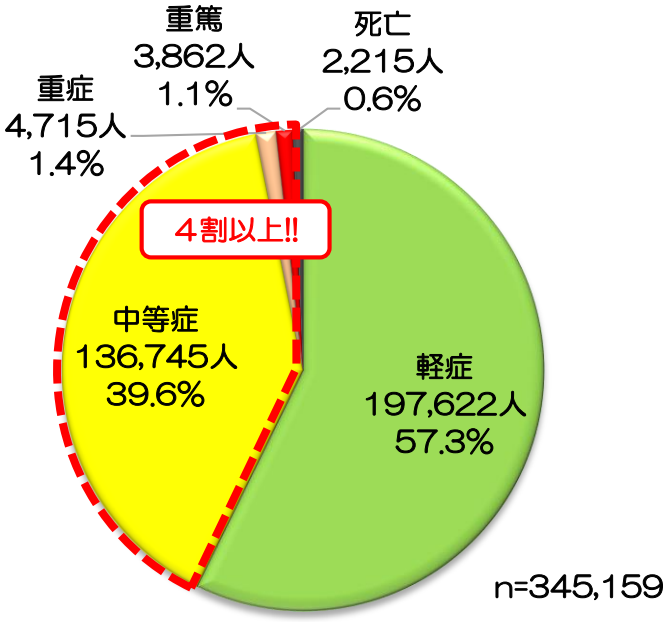


図１－１：日常生活事故での高齢者の救急搬送人員の推移

⑵　初診時程度別及び年齢別救急搬送人員と中等症以上の割合

平成２５年からの５年間で救急搬送された高齢者の初診時程度別では、４割以上が入院の必要がある中等症以上と診断されています（図１－２）。

また、入院の必要がある中等症以上の割合は、高齢になるにつれて増加しています（図１－３）。



軽　症：入院の必要がないもの
中等症：生命の危険はないが、入院の必要があるもの
重　症：生命の危険が強いと認められたもの
重　篤：生命の危険が切迫しているもの
死　亡：初診時に死亡が確認されたもの

図１－２：高齢者の初診時程度別救急搬送人員

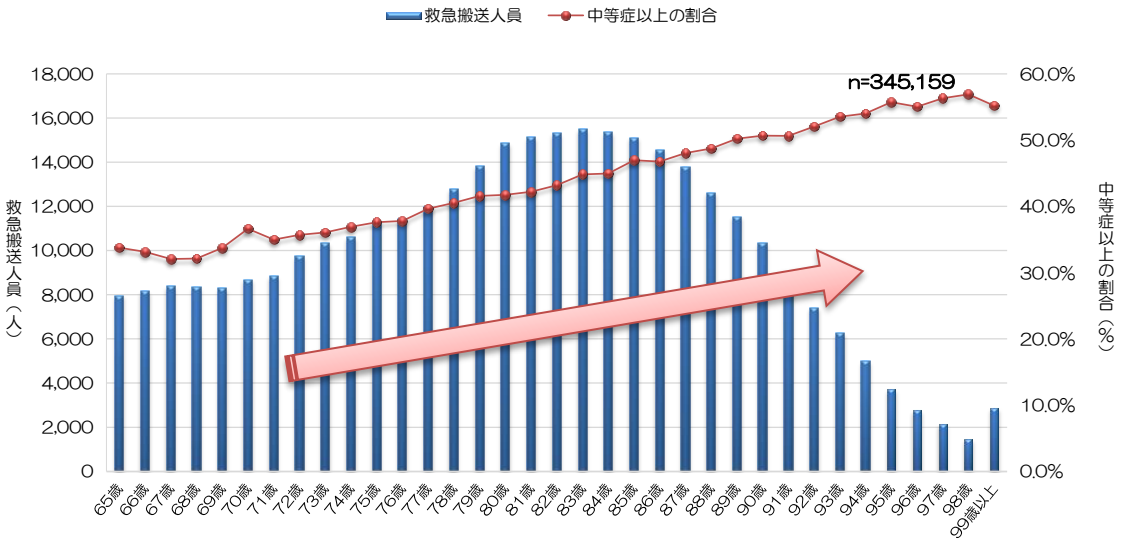


図１－３：高齢者の年齢別救急搬送人員と中等症以上の割合

⑶　事故種別ごとの救急搬送人員

事故種別では、「ころぶ」事故が全体の約８割を占め、次いで「落ちる」事故が多く発生しています（「その他」や「不明」を除く。）。

また、「ころぶ」、「落ちる」事故だけで５年間に約２８万人の高齢者が医療機関に救急搬送されています（図１－４）。

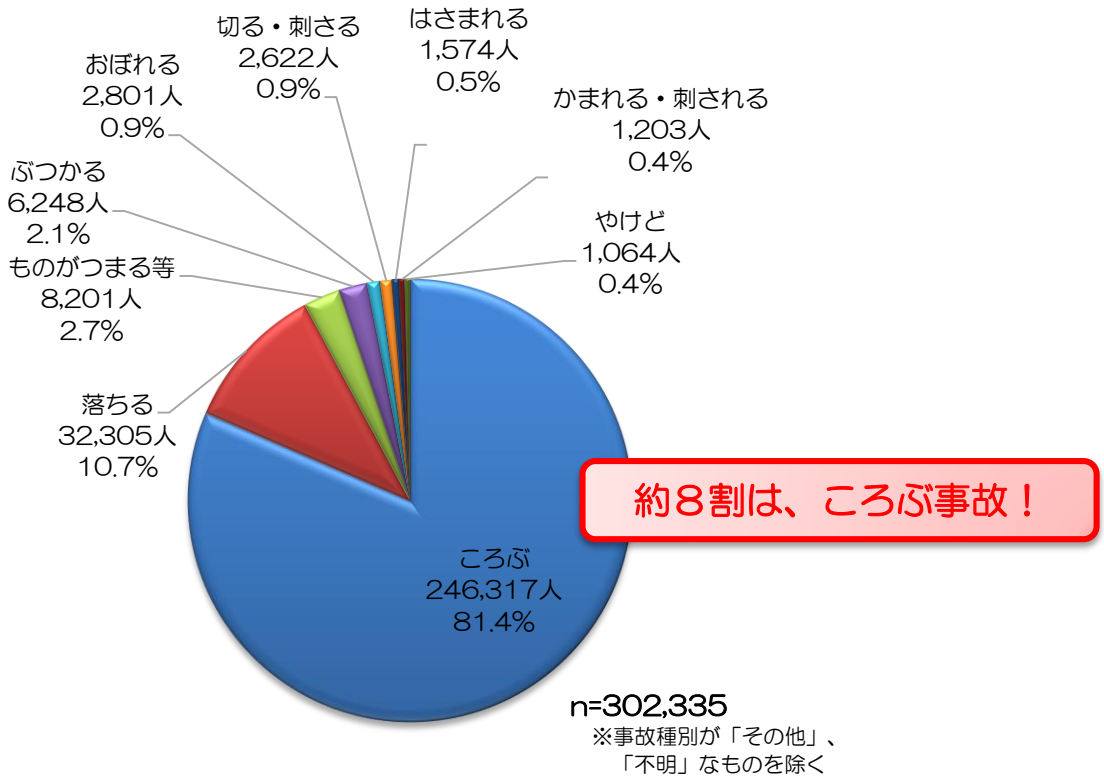


図１－４：事故種別ごとの高齢者の救急搬送人員

⑷　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

事故種別ごとに入院が必要とされる中等症以上の割合をみると、「おぼれる」事故の９８．１％が最も高く、次いで「ものがつまる等」による事故が高くなっています（図１－５）。

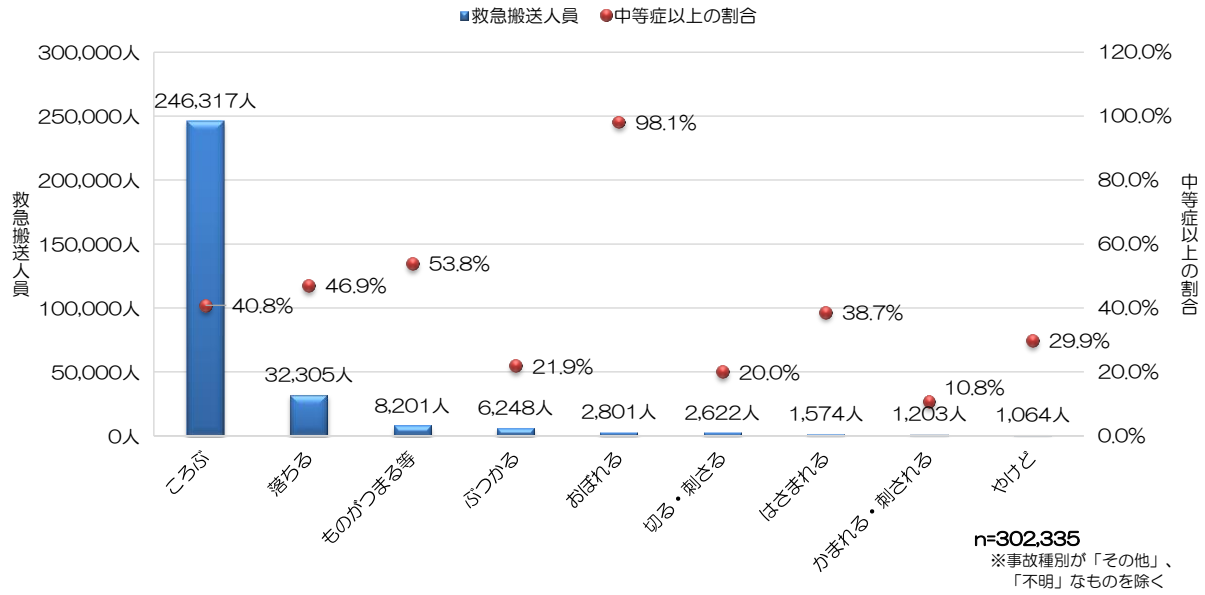


図１－５：事故種別ごとの高齢者の救急搬送人員と中等症以上の割合

２　平成２９年中の高齢者の日常生活事故発生状況

⑴　高齢者の日常生活事故による救急搬送状況

平成２９年中に日常生活の事故で救急搬送された高齢者は76,889 人で、年齢ごとに人口１０万人あたりの救急搬送人員をみると、年齢が高くなるにつれて救急搬送人員が増加していることが分かります（図２－１）。

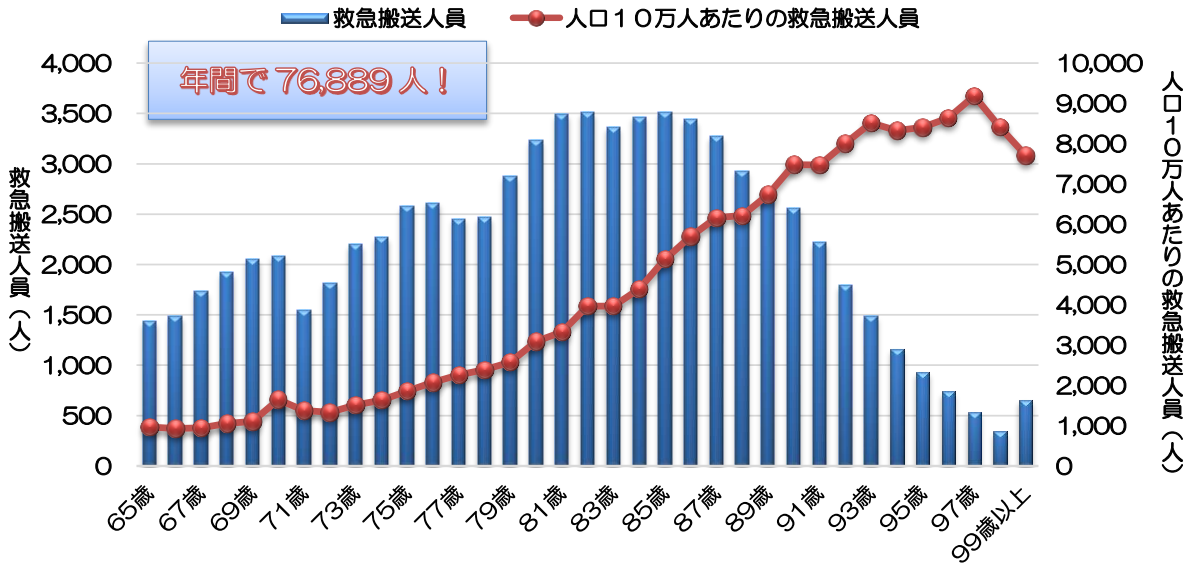


図２－１：高齢者の年齢別救急搬送人員と人口１０万人あたりの救急搬送人員（平成２９年中）

⑵　事故種別ごとの救急搬送人員及び中等症以上の割合

平成２９年中の事故種別では、過去５年間と同様に「ころぶ」事故が全体の約８割を占め、次いで「落ちる」事故が多く発生しています（図２－２）。

また、事故種別ごとに入院が必要とされる中等症以上の割合では、「おぼれる」事故の９８．７％が最も高く、次いで「ものがつまる等」による事故が５２．０％と高くなっています（図２－３）。

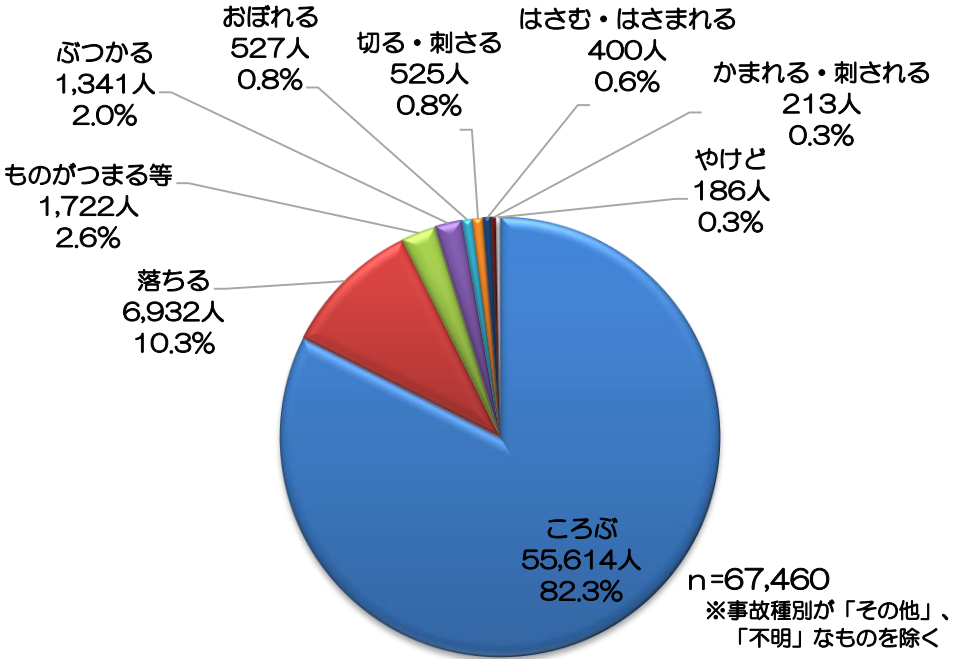


図２－２：事故種別ごとの高齢者の救急搬送人員（平成２９年中）

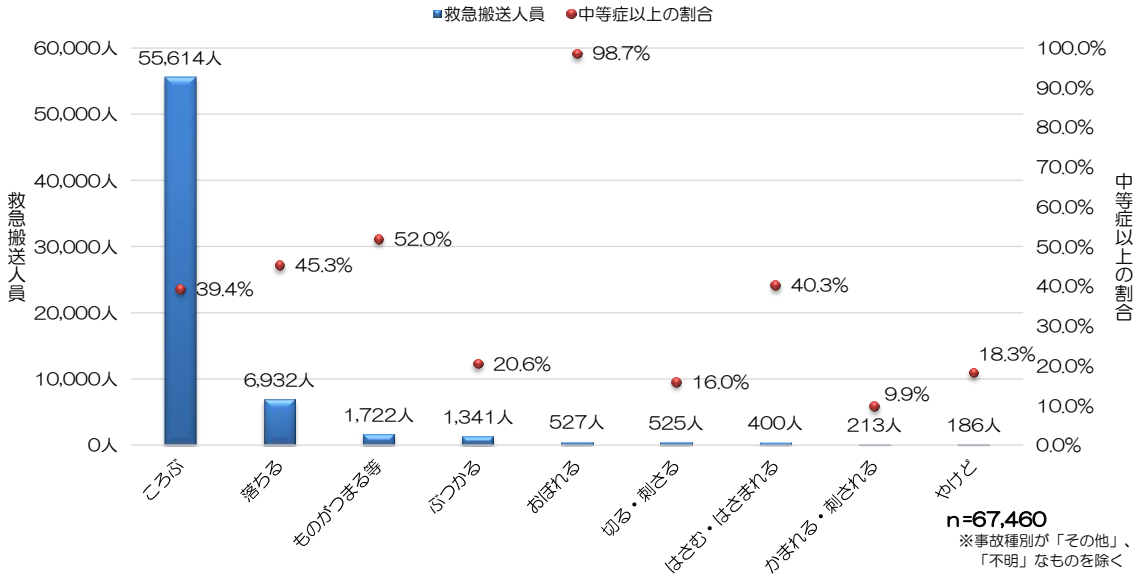


図２－３：事故種別ごとの高齢者の救急搬送人員と中等症以上の割合（平成２９年中）

⑶　「ころぶ」事故の発生状況

高齢者の事故の中で最も多いのが「ころぶ」事故で、毎年多くの高齢者が「ころぶ」事故でケガをして救急搬送されています。平成２９年は平成２４年より 11,362 人増加し55,614 人が救急搬送されています（図２－４）。

また、人口１０万人あたりの救急搬送人員をみてみると、年齢が高くなるにつれて増加しています（図２－５）。

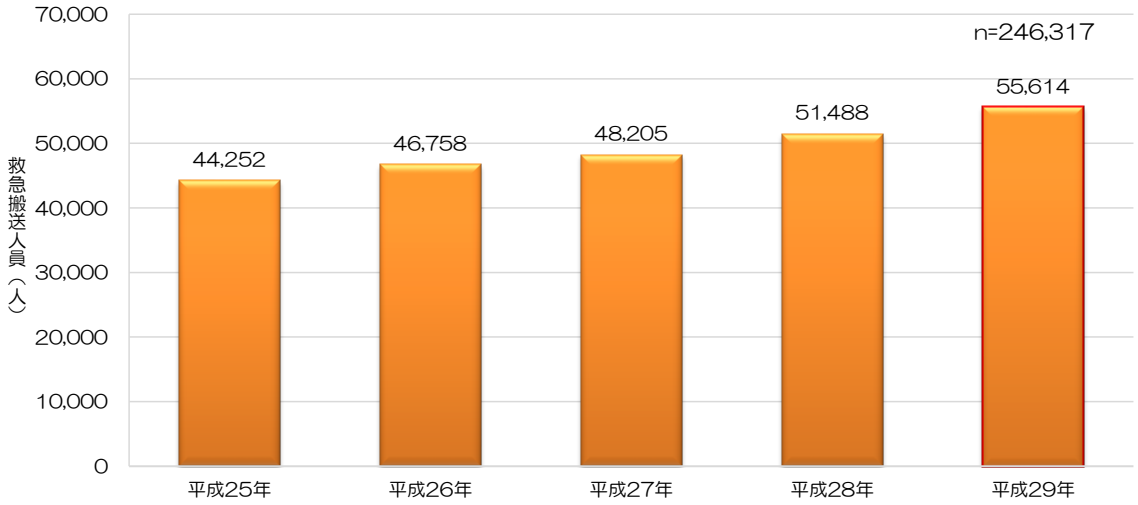


図２－４：「ころぶ」事故による高齢者の年別救急搬送人員

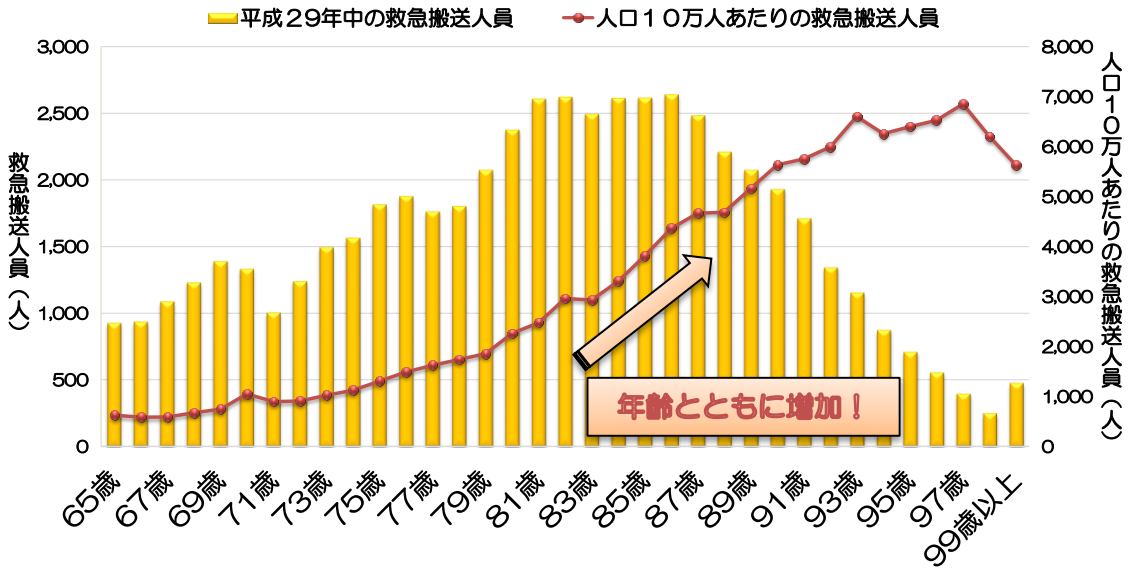
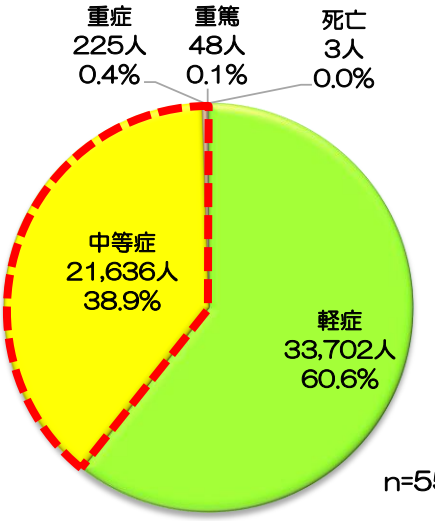


図２－５：「ころぶ」事故による高齢者の年齢別救急搬送人員と
人口１０万人あたりの救急搬送人員（平成２９年中）

⑷　「ころぶ」事故の初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度では軽症が最も多いですが、約４割の高齢者が入院の必要がある中等症以上と診断されています（図２－６）。



軽　症：入院の必要がないもの
中等症：生命の危険はないが、入院の必要があるもの
重　症：生命の危険が強いと認められたもの
重　篤：生命の危険が切迫しているもの
死　亡：初診時に死亡が確認されたもの

図２－６：「ころぶ」事故による高齢者の初診時程度別救急搬送人員（平成２９年中）

⑸　「ころぶ」事故の発生場所及び住宅等居住場所における発生場所上位５位

事故の発生場所では、「住宅等居住場所」が最も多く、次に「道路・交通施設」となっています。

「住宅等居住場所」の 31,308 人を屋内と屋外に分けてみると、屋内での発生が28,823 人で９割以上を占めています。また、住宅等の屋内の発生だけで、「ころぶ」事故全体の５割以上を占めています（図2-7）。

「住宅等居住場所」で「ころぶ」事故が多く発生した場所を見てみると、「居室・寝室」が最も多く、次に「玄関・勝手口」、「廊下・縁側」となっています（表２－１）。

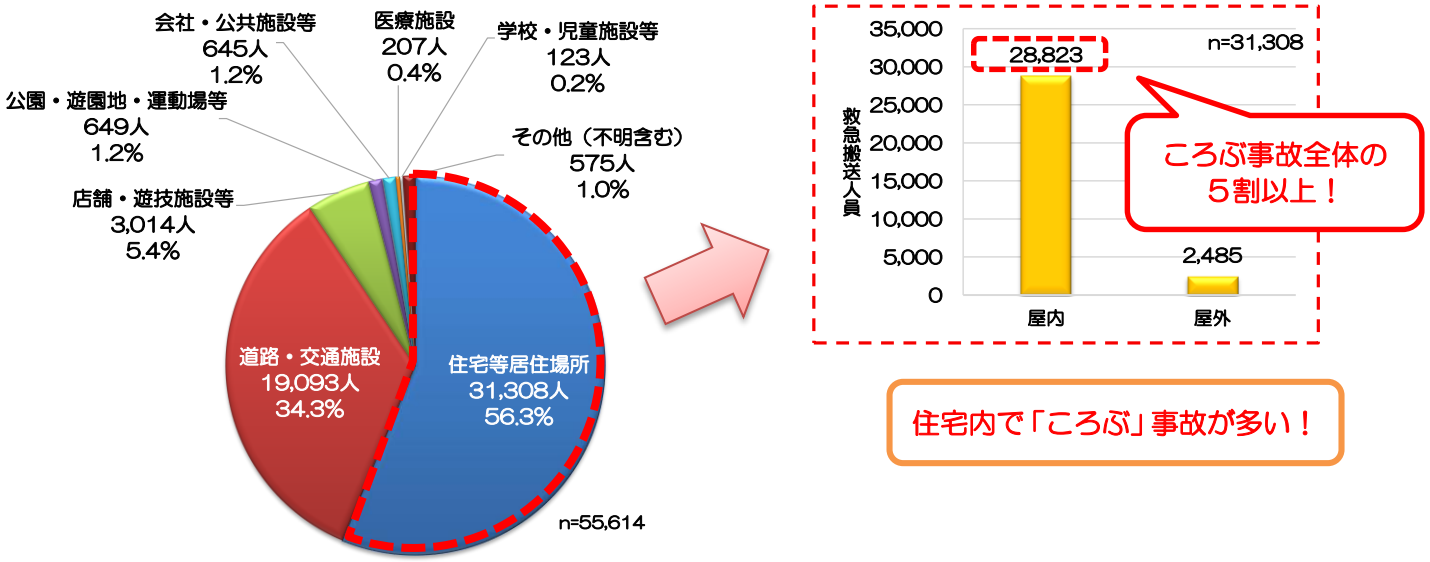


図２－７：高齢者の「ころぶ」事故の発生場所（平成２９年中）

表２－１：住宅等居住場所における高齢者の「ころぶ」事故の発生場所上位５位（平成２９年中）

	１位	２位	３位	４位	５位
事故発生場所	居室・寝室	玄関・勝手口	廊下・縁側	トイレ・洗面所	台所・調理場・ダイニング
救急搬送人員	21,532人	2,875人	2,289人	908人	783人

⑹　「落ちる」事故の発生状況

高齢者の事故の中で「ころぶ」事故に次いで多いのが「落ちる」事故で、毎年５,０００人以上が救急搬送されています。

平成２９年は6,932 人と５年間で最も多く救急搬送されています（図２－８）。

また、人口１０万人あたりの救急搬送人員をみると、年齢が高くなるにつれて増加していることが分かります（図２－９）。

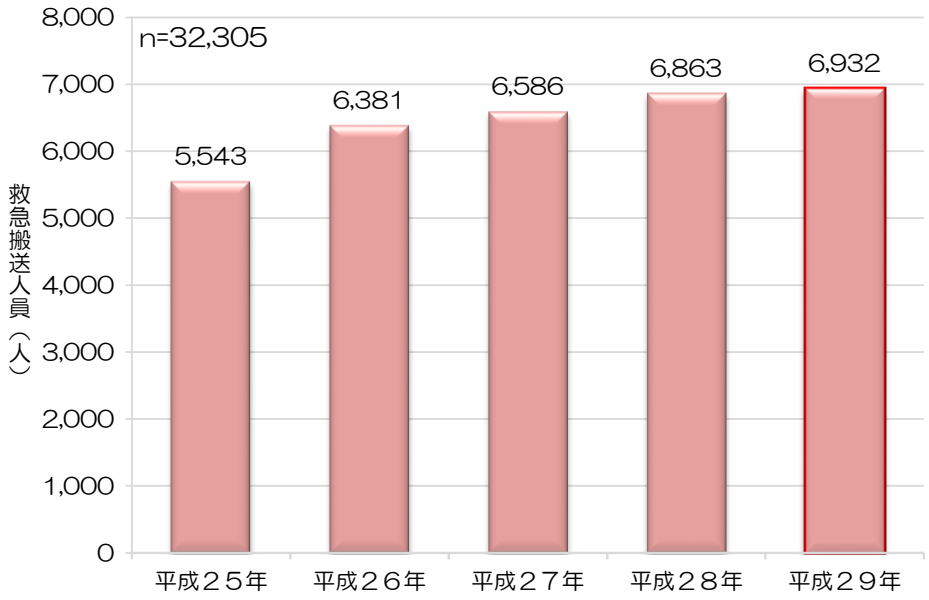


図２－８：「落ちる」事故による高齢者の年別救急搬送人員

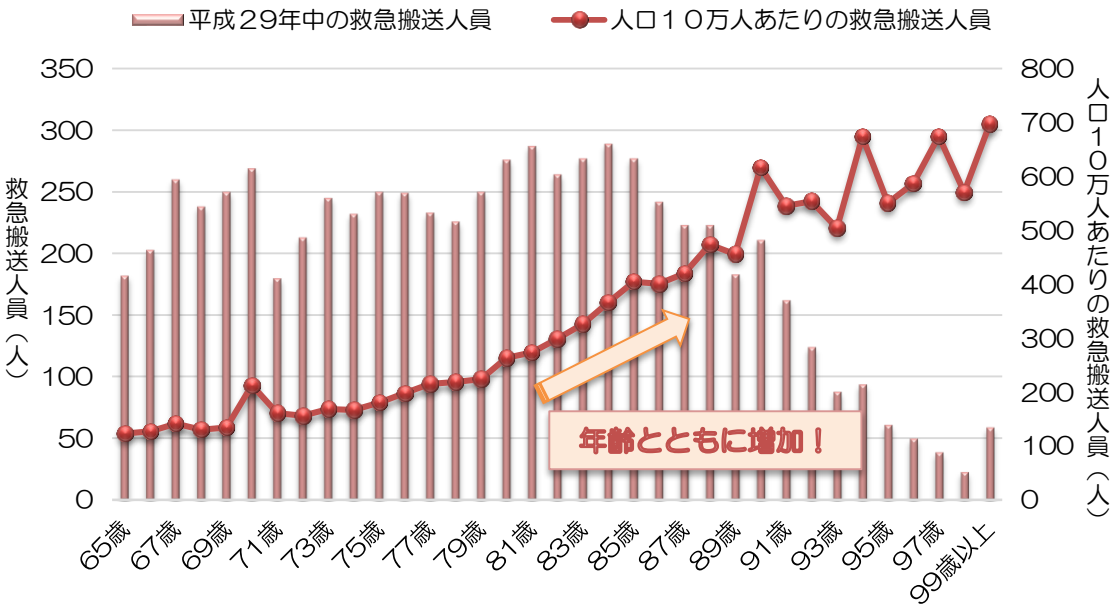


図２－９：「落ちる」事故による高齢者の年齢別救急搬送人員
と人口１０万人あたりの救急搬送人員（平成２９年中）

⑺　「落ちる」事故の初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度では４割以上の高齢者が入院の必要がある中等症以上と診断されています（図２－１０）。

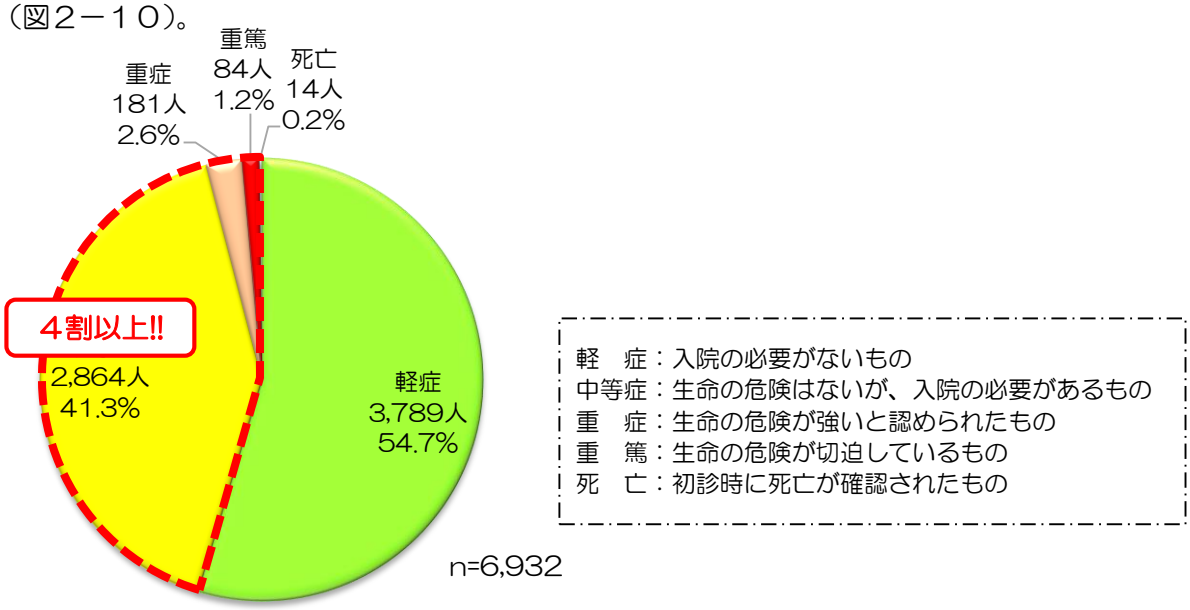


図２－１０：「落ちる」事故による高齢者の初診時程度別救急搬送人員（平成２９年中）

⑻　「落ちる」事故の発生場所及び事故原因上位５位

事故の発生場所では、７割以上が「住宅等居住場所」で発生しています（図２－１１）。

また、事故原因をみると、最も多いのが「階段」で、全体の約５割を占め、次いで「ベッド」の1,075 人となっています。（表２－２）。

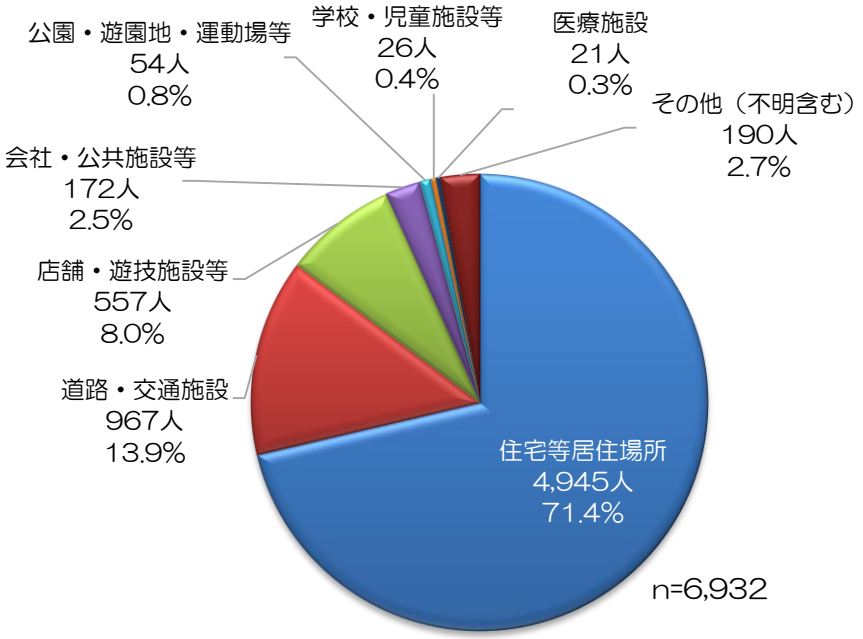


図２－１１：高齢者の「落ちる」事故の発生場所（平成２９年中）

１位	２位	３位	４位	５位
階段	ベッド	椅子	脚立・踏み台・足場	エスカレーター
3,349人	1,075人	460人	400人	254人

表２－２：高齢者の「落ちる」事故の事故原因上位５位（平成２９年中）

⑼　「ものがつまる等」による事故の発生状況

高齢者の事故の中で重症度の高い事故の１つが「ものがつまる等」による事故です。

平成２９年は、1,722 人の高齢者がものをつまらせる、誤って飲み込んでしまうことにより救急搬送されています（図２－１３）。

また、人口１０万人あたりの救急搬送人員をみると、８０歳代中盤から年齢が高くなるにつれて増加しています。（図２－１４）。

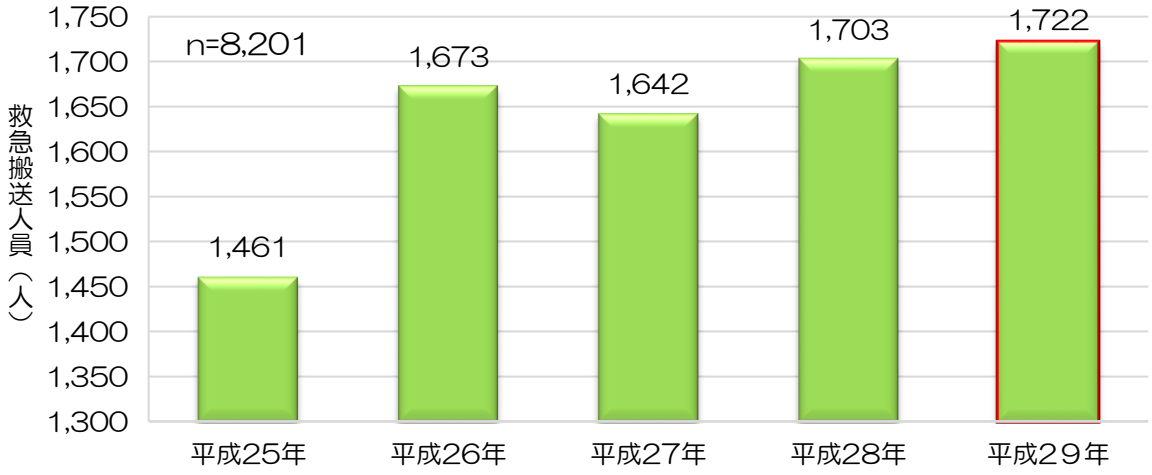


図２－１３：「ものがつまる等」による事故による高齢者の年別救急搬送人員

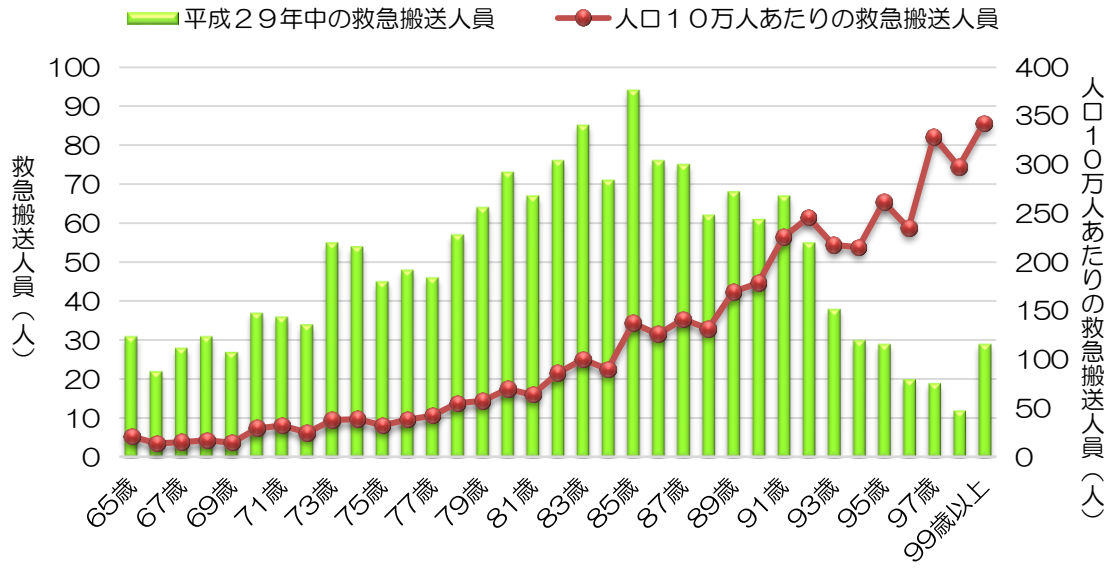


図２－１４：「ものがつまる等」の事故による高齢者の年齢別救急搬送人員と
人口１０万人あたりの救急搬送人員（平成２９年中）

⑽　「ものがつまる等」事故の初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度では５割以上の高齢者が入院の必要がある中等症以上と診断され、350人が生命の危険がある重症以上と診断されています（図２－１５）。

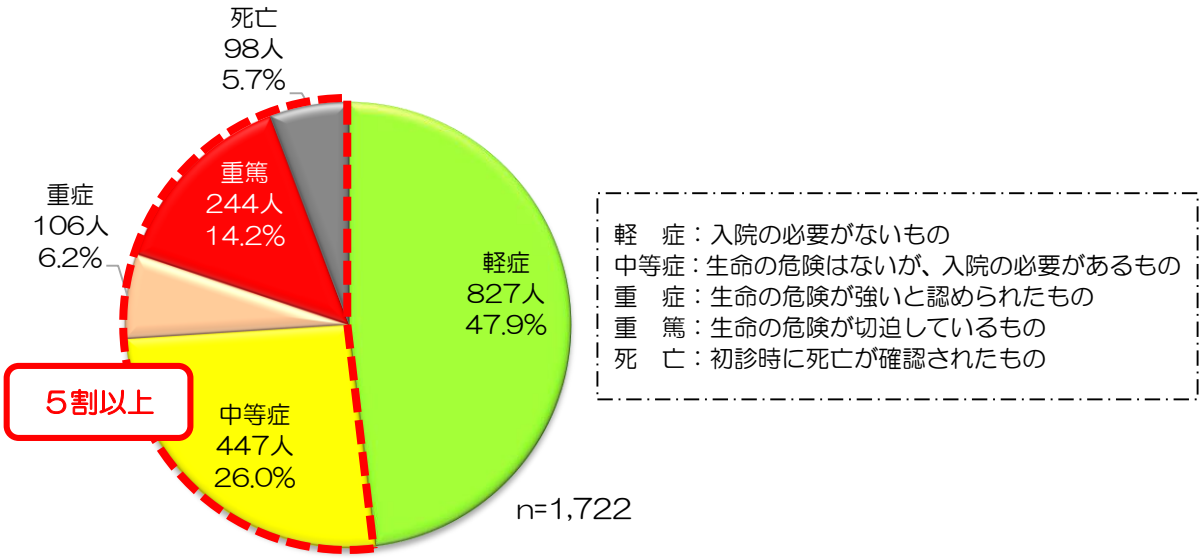


図２－１５：「ものがつまる等」の事故による高齢者の初診時程度別救急搬送人員（平成２９年中）

⑾　「ものがつまる等」の事故の発生場所及び事故原因上位５位

事故の発生場所では、９割以上が「住宅等居住場所」で発生しています（図２－１６）。

また、製品が判明したもののうち、事故の発生原因で最も多かったものは「おかゆ類」で、次に「御飯」、「肉」、「包み・袋」と続いています。（表２－３）。

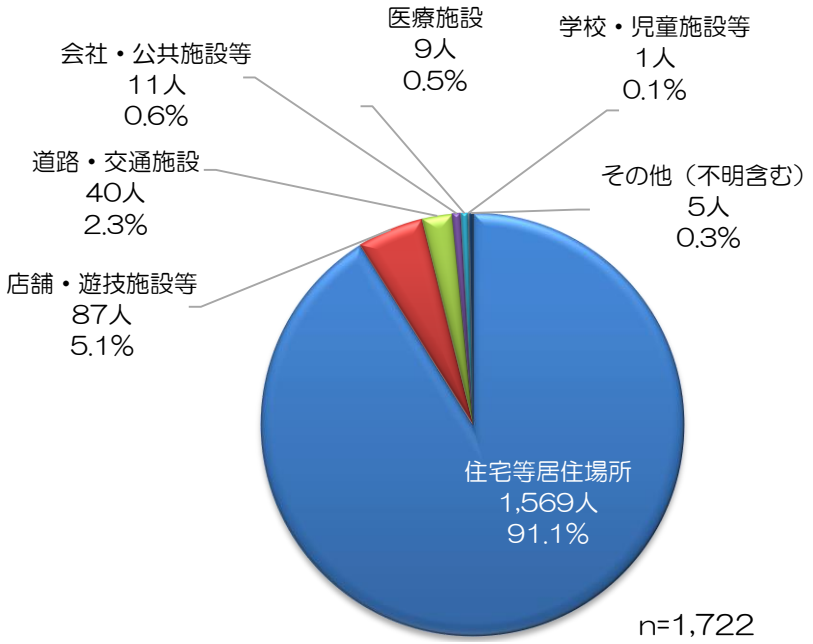


図２－１６：高齢者の「ものがつまる等」の事故発生場所（平成２９年中）

	１位	２位	３位	４位	５位
事故発生場所	おかゆ類	御飯	肉	包み・袋	野菜・果物
救急搬送人員	１２５人	１００人	９９人	９７人	９６人

表２－３：高齢者の「ものがつまる等」の事故原因上位５位（平成２９年中）

⑿　「おぼれる」事故の発生状況

高齢者の事故の中で最も重症化しやすい事故が「おぼれる」事故です。５年間で2,801 人が救急搬送され、入院の必要がある中等症以上と診断された高齢者は、毎年 ９ 割を超えています（図２－１８）。

また、平成２９年中の月別の搬送人員では、１２月から３月に多く発生していることが分かります（図２－１９）。

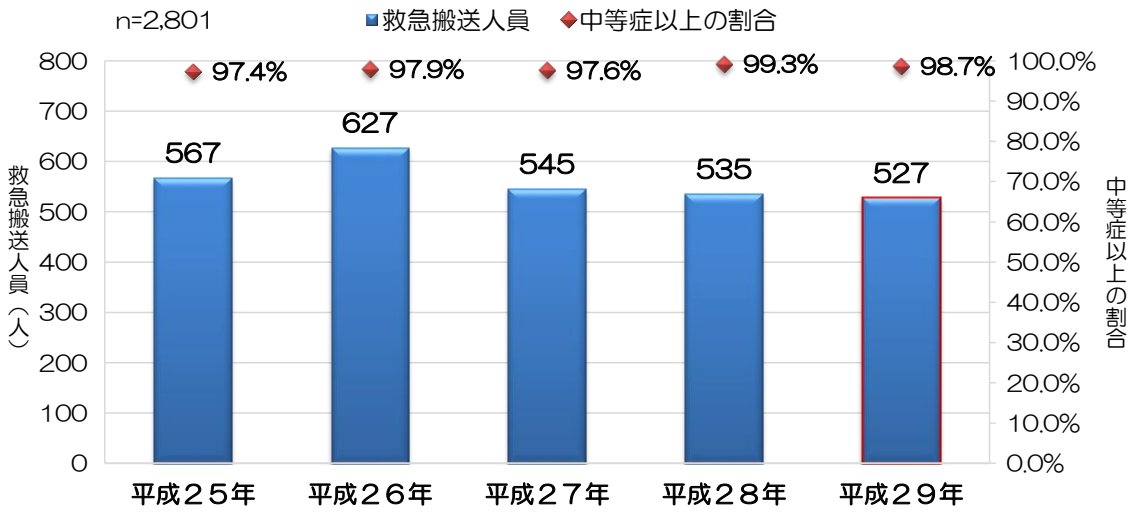


図２－１８：「おぼれる」事故による高齢者の年別救急搬送人員と中等症以上の割合

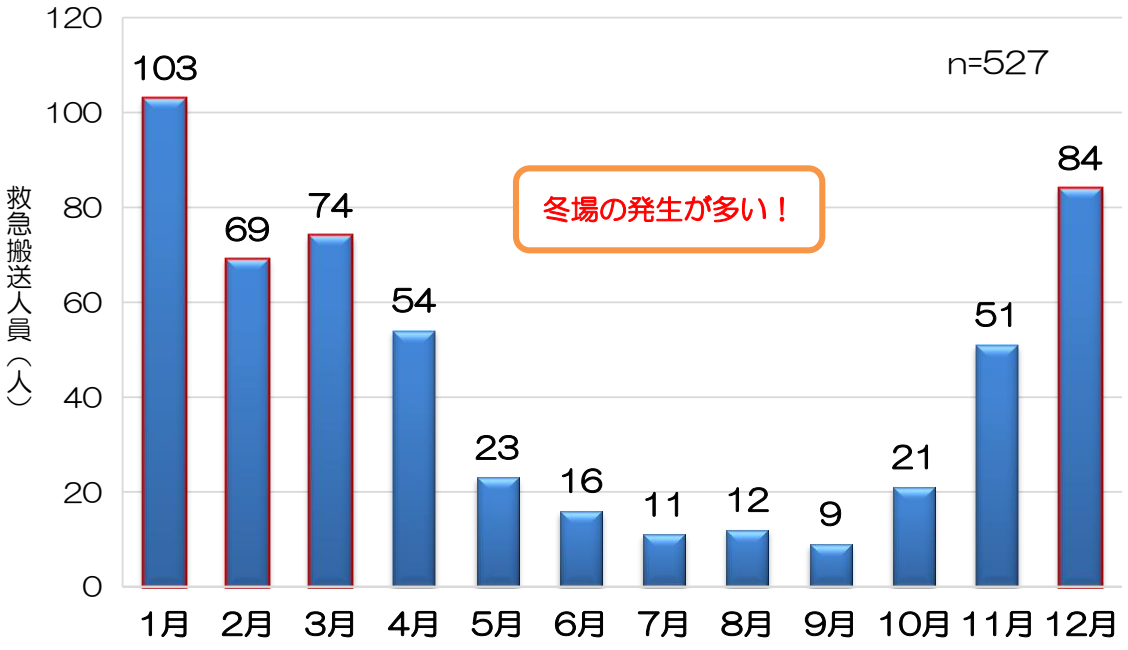


図２－１９：「おぼれる」事故による高齢者の月別救急搬送人員（平成２９年中）

⑬　「おぼれる」事故による初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度では、他の事故と異なり中等症以上の割合が９８．７％と非常に高く、４７６人が生命の危険がある重症以上と診断されています（図２－２０）。

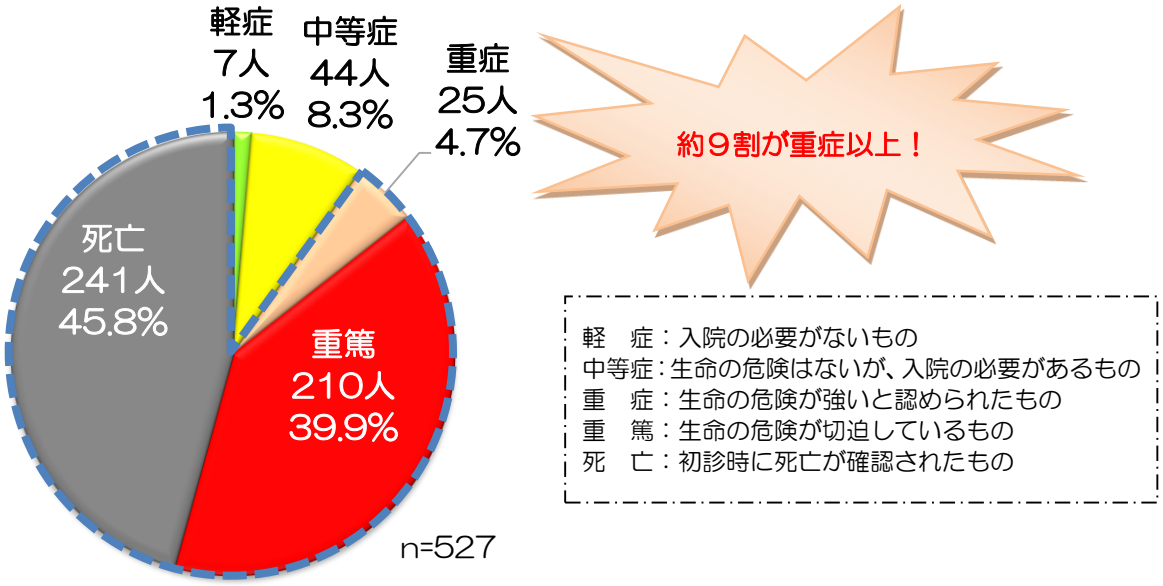


図２－２０：「おぼれる」事故による高齢者の初診時程度別救急搬送人員（平成２９年中）

⑭　「おぼれる」事故の発生場所

事故の発生場所では、「住宅等居住場所」が480 人と９割以上を占め、その全てが浴槽で発生しています（図２－２１）。

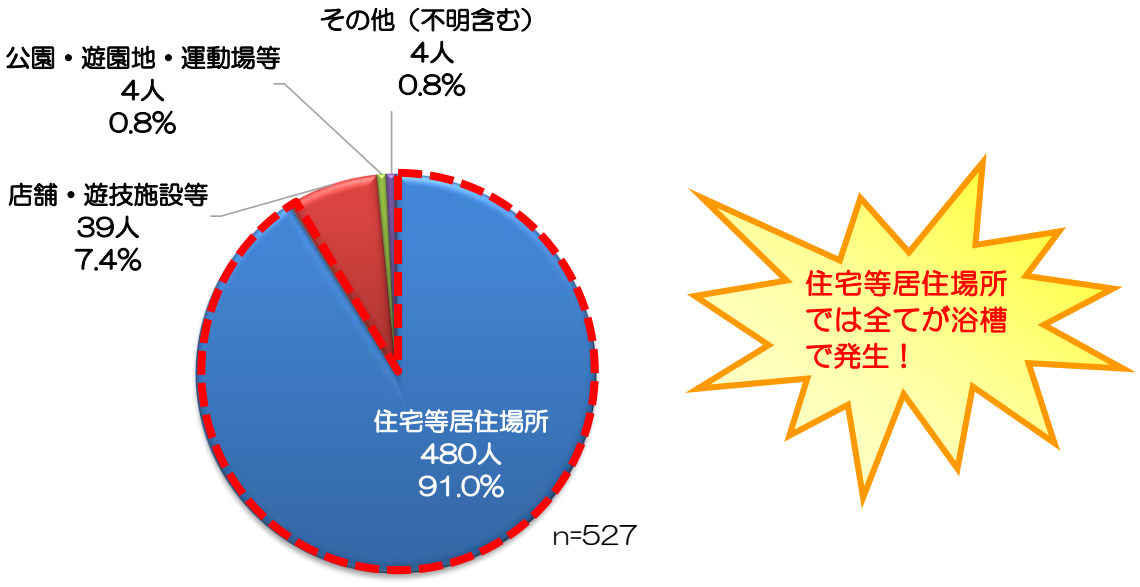


図２－２１：高齢者の「おぼれる」事故の発生場所（平成２９年中）

３　平成２９年中の高齢者の事故事例

【ころぶ事故】

○　自宅居室内にて敷居に躓いて転倒し、右足の太ももを骨折した。（７０代　中等症）

○　自転車を降りようとした際に、バランスを崩し転倒し、右腕を骨折した。（７０代　重症）

○　自宅で入浴中、浴室から洗い場に出る際に滑って転倒し腰を受傷した。（９０代　中等症）

【落ちる事故】

○　自宅の階段２～３段目から１階廊下に転落し、左太ももを受傷した。（８０代　中等症）

○　ベッドから降りようとした際に、ベッド上の枕につまずいて床上に転落し、腰部を受傷した。（８０代　中等症）

○　高さ約２ｍの脚立を使用し庭木の剪定中に、誤って転落した。（７０代　重篤）

【ものがつまる等による事故】

○　雑煮を食べていたところ、餅をのどに詰まらせて、顔色が悪くなり意識がなくなった。（７０代　重症）

○　薬を飲もうとした際に、誤って薬の空包を飲み込んでしまった。（７０代　中等症）

【おぼれる事故】

○　お風呂から出てこなかったため家族が様子を見にいったところ、浴槽内で意識が無く、口までお湯に浸っていた。（７０代　重篤）

○　入浴介助中の家族が、１０分ほど目を離して戻ったところ湯船に顔が半分ほど浸っていた。（８０代　中等症）